

## 論文要旨

【背景】心不全は急性増悪により症状が進行し生活の質を低下させる予後不良の疾患である。増悪予防にはセルフケア能力の向上が重要であり心不全急性期から教育が実施される。しかし、セルフケア能力を十分に発揮できない患者に対し自宅で継続可能な指導を行うことは容易でない。そのような患者には訪問看護の積極的な活用が推奨されており、心不全発症から末期に至るまでの StageC の訪問看護実践を記述することで、患者特性を理解し生活に即した具体的な患者指導が必要となる病院勤務の看護師への示唆となると考える。

【目的】 StageC 程度の心不全増悪ハイリスク療養者へ訪問看護師が実施している生活の中での疾病管理に関する看護実践(以下、StageC 程度の利用者への訪問看護実践)を記述することを目的とした。

【方法】研究デザインは訪問看護師の語りに基づくグラウンデッド・セオリー・アプローチによる質的帰納的研究である。対象者は、A 県の訪問看護事業所に所属し、StageC 程度の心不全増悪ハイリスク療養者(セルフケア力が十分でない高齢、独居、認知機能障害、ADL 低下のいずれかがある者)に対し効果を実感した疾病管理の経験をもつ認定看護師と専門看護師 10 名とした。インタビュー収集期間は 2016 年 7 月～10 月、1 人 1 回平均 70 分程度の半構成的インタビューを行った。本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認 16-A016 を受け実施した。

### 【結果】

8 個のカテゴリーと 19 個のサブカテゴリー1、30 個のサブカテゴリー2 が抽出され、カテゴリーのうち「安定した生活ができるように促す」をコアカテゴリーに選定した。訪問看護師は【心不全の有無を問わず訪問看護の依頼を受ける】ことをきっかけに、【信頼関係を構築し受け入れてもらう】行動を始めた。そして、看護実践の方向性を【その人らしく暮らせるよう支援をする】ことで共に検討し、【利用者の自立の程度を判断する】ことで訪問看護師の介入の濃密さを決定した。それに基づき服薬、食事、入浴、スキントラブル、モニタリング、生活環境の調整に関する支援という「安定した生活ができるように促す」実践と、増悪因子を捉え増悪を予防し悪化に対応する【安定した生活ができるように医療的側面から心不全の安定を支援する】実践が行われた。そして、実施した看護実践について【安定した生活に向けた支援を評価し支援の意義を見出す】ことで、その人らしい暮らしが目指されていた。また、【医師に心不全の増悪を予防する観点からサービス継続の交渉をする】ことも行われた。

### 【結論】

StageC 程度の利用者への訪問看護実践は、その人らしい暮らしを目指して「安定した生活ができるように促す」こと、【安定した生活ができるように医療的側面から心不全の安定を支援する】ことを特徴としていた。病院に勤務する看護師への示唆として、その人らしい暮らしを目指し安定した生活を促す視点を持ち心不全の教育を行うことが重要だと考える。今後、理論的飽和を目指した研究継続が必要である。